
茜空に映る君

九条玖々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜空に映る君

【Nコード】

N9269L

【作者名】

九条玖々

【あらすじ】

放課後、いつも通り公園に寄り道をすると、珍しく先客がいた。だが、その先客は……。

上

寒い……。

もう四月の頭だというのに、何だこの寒さは？　これが地球温暖化の影響だというのか……。

そんなことはともかく、どうして俺の通う高校は丘の上なんかに建ってるんだ？　そんなとこに建っているものだから、行きは上り坂、帰りは下り坂が延々と続いている。当たり前だけど。

そして今は下校中。まさしく下っている最中だ。幸い学校の前にコンビニがあるから帰りは買い食いして英気を養える。それでも長いがな、この坂。生徒からは別名、“地獄坂”と呼ばれている。

知らない予備知識だが、本当は車坂というそうだ。名前の由来は昔、輪入道がよく現れたからだとかなんとか……。

こんな坂でも実は一つだけ自慢できることがある。中腹辺りに公園があるのだが、そこから見る景色は最高だということだ。何せこの街を一望できるのだから。まあ、ほとんどの生徒は気にもかけないが……。これは俺の趣味ということだ。

そして今日も、公園に立ち寄って日が沈むまで景色を一望する予定だ。

「やつと着いたな
ん？」

公園に入ると、一本だけ立つ木に寄りかかる人影が目に入った。

「先客か」

たまに見かけるが、いつの間にかいなくなっているの俺はあまり気にはしていなかった。

「こんにちは。あ、もうこんばんはかな」

今まで一度も声をかけたことも、かけられたこともなかったのに、何を思ったのかその影の女性は俺に挨拶してきた。

「こんばんは」

俺も挨拶を返し、彼女の隣に立った。年は俺よりも上で、少したれ目のおっとりとした顔立ちが印象的だった。

彼女のセミロングの髪が風に靡く。

「私、ここから見る景色が凄く好きなの」

「あ、俺もです」

「そうなんだ。気が合いそうね」

彼女はくすつと微笑んだ。

「私ね。ここから景色を眺めていると、嫌なこととか忘れられるんだ」

嫌なこと……ね。確かに、ここから眺めているだけで、気持が落ち着く。

「俺も似たようなもんですよ。毎日が退屈で、でもここにいるときだけは何もかも新鮮に感じられる」

雲の位置一つですべてが違って見える。そんな幻想的な世界に俺は魅かれたんだと思う。

それからしばらくは無言で景色を眺めていた。特に会話が必要というわけでもないし。

日は沈み、空は次第に藍色へと変わっていく。

そろそろ、帰り時かな。

「飲みます？」

コンビニで買ったのはいいが、結局飲まないままのホットココアを彼女に差し出す。

「もらっていいの？」

「ええ、結局野まず仕舞いでしたし。今日はよく冷えてるので、何か温かいもの飲んだ方がいいですよ」

彼女は「ありがとう」と言い、それを受け取った。

「あ、そういえば自己紹介がまだね。私は二ノ宮友利子。友利子って呼んで」

そういえばそうだな。特に必要ないと思っていたが、名乗られたからには名乗り返さないと。

「俺は野々蔵初って言います」

「ハジメくんかぁ……。良い名前ね」

友利子さんはペットボトルの蓋を開け、お茶を飲んだ。

「ありがとうございます。じゃあ、俺はそろそろ帰ります」

あまり遅くなると、晩飯を作るのが面倒になる。

「そう。じゃあ、またね」

彼女は小さく手を振る。

そんな彼女を背に、俺は長い下り坂を歩き始めた。

中

特にこれといった用事もなかったので、下校がてらに俺は昨日と同じ公園に立ち寄った。

どうやらまだ友利子さんは来ていないようだ。まあ、彼女がいようがいなかるうが、あまり関係はないが。

俺はベンチに座り、コンビニで買ったおにぎりを食べる。ちなみに具はシーチキンだ。店員曰く、何気におにぎりの中で一番人気があるらしい。

「おいしそうね」

「!？」

急に真後ろから声を掛けられ、心臓が止まりそうになった。振り返ると、友利子さんが立っていた。

「……友利子さん、脅かさないで下さいよ。本気でショック死するところでした」

俺の反応に満足したのか、彼女は微笑みながら俺の隣に座った。

「大袈裟ね」

くすつと彼女が笑う。それにしても彼女、普段は何をしているのだろうか？ いつも夕方にはここにいるし……。

「友利子さんって、普段は何をしているんですか？」

「ん？ 私？ そうだなあ、ニートかな」

「……はあ。無意識に溜息が漏れた。」

「ついこの前まで、婚約してたんだ、私」

「へえー。てか過去形!？」

「何かあったんですか？」

離婚は多いが、婚約破棄なんてそうあるものではない。何か複雑な事情があるのだろうか？

「実はね——」

“死んだんだ、私”

「え？」

「冗談だろ？　　というか、冗談だよな。流石にそれはないだろう。だつて今俺とこうして会話してるし。」

「あ、さては信じてないな？」

彼女は表情一つ崩さず、そう言った。

「ええ。残念なことに信じてません」

俺がそつ返すと、「そっか」と呟き、彼女は目の前に広がる光景に目を向ける。

「食べます？」

俺はコンビ二袋から二つ目のおにぎりを取り出し、彼女に差し出す。

「ありがとう」

彼女はそれを受け取り、包装フィルムを剥がす。

「すいません。信じられなくて」

俺の言葉に彼女はまたくすつと笑った。

「いいのよ」

彼女はおにぎりを一口食べる。

空はいつの間にか藍色に変わっていた。公園の電灯が点いていく。そろそろ、帰り時か。

だが、今日はもう少しいたい気がした。

「夜も綺麗よね。ここの景色は」

彼女は立ち上がり、柵から身を乗り出す。

「危ないですよ」

「わ、わ、落ちる！！」

その言葉を掛けた直後だった。彼女の足が宙に浮き、ばた足をしている。

俺はとっさに彼女に駆け寄り、彼女の体をしっかりと掴んだ。

何というか……言った尻からこれか。何とか間に合い、胸をなで

おろす。ついでに呆れ半分の溜息も出た。

「言わんこっちゃない」

「……ありがと。彼も、ハジメくんくらいに優しくしたら良かったのに」

彼女は苦笑いを浮かべ、そう呟いた。

「……………」

彼女が初めて見せた、切ない表情に動揺してしまった。
気休めの言葉も言えない。情けないな、俺。

「今日はありがと」

……………ッ!?

直後、俺の唇が彼女のそれが重なった。

「凄い顔してるよ?」

くすつと笑い、彼女はまた元の表情に戻った。

「冗談きついですよ」

ヤバい、マジで惚れそうだった。

「じゃあ、私はそろそろ帰るわね」

彼女は昨日と同じく小さく手を振り、何事もなかったかのように公園の前の坂を下っていった。

「ふう……。まったく、厄介な人だな」

しばらく無心で夜空を眺めた後、俺は帰路についた。

下

今日は一日、雨に見舞われた。

天気予報では夕方には止むと言っていたが、放課後になっても一向に止む気配がしない。

俺はコンビニで買ったホットココアを開け、一気に飲み干した。やっぱり、寒い日にはココアに限るよな。体の芯まで温まる。ちなみにココア限定なのはコーヒーが飲めないからだ。

そうこう言っている内に、いつもの公園の前まで来た。だが今日は雨が降っているし、流石に友利子さんもいないだろう。

そんなことを思いながら、公園に入る。

いつもの場所に行こうと歩いていると、木の陰に人の姿が見えた。

「ちょッ!? 友利子さん、風邪引きますよ!？」

彼女は木にもたれながら、曇った空を眺めていた。

俺は慌てて彼女を傘の中に入れ、鞆からスポーツタオルと後で飲もうと買っておいたもう一本のホットココアを彼女に手渡す。

「……ありがとう。やっぱりハジメくんは優しいね」

彼女の顔にいつもの笑顔はなかった。

「どうしたんですか？」

流石に、理由を聞かないわけにもいかない。

「ちょっとした賭け。負けちゃったけどね」

賭けに負けた……。か。そんな理由で……。

「もつと自分の体を大事にして下さい」

「やっぱり優しい。ハジメくんには全部話してもいいかな」

彼女はココアを二口ほど飲み、深呼吸をして話し始めた。

「私、ここで待っていたのよ、彼を。この公園、初めて彼と会った場所なの。だから、ここに通えばもう一度彼に会えるんじゃないかって。でも……そんな馬鹿げたことも今日で最後。結局、彼は一度も来なかった……」

俺は傘や鞆を投げ捨て、泣き崩れる彼女を支えた。

「私……。私は……」

友利子さん……。

俺はただ無言で彼女を抱きしめた。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。ずるいよね……。私」

今この瞬間だけは、例え一時的な悲しみの捌け口にされているのだとしても、俺は別に構わないと思った。

ただただ、彼女を支えたい。その思いでいっぱいだった。

「今だけは、いいですよ。気が済むまで泣いてください。その間、俺はずっと友利子さんの側にいて、必要ならこうやって抱きしめますから。思う存分、泣いてください」

——どれくらい時間が経ったのだろうか。彼女は雨と共に涙を流し続けていた。

俺はそんな彼女をずっと抱きしめていた。

「……ありがとう、私なんかの為に」

少し落ち着きを取り戻したのか、彼女は鼻声でそう言った。

「貸しにします。また今度、返して下さい」

そう言っただけで彼女から離れようとしたが、彼女の手は俺を放してはくれなかった。

「もう少しだけ、このままでいて……」

少し照れくさかったが、俺は頷き、再び彼女を抱きしめた。

「もっと……もっと早くにハジメくんと出会いたかった」

彼女は俺の唇に、自分のそれを重ねた。今度はゆっくりと、思いをぶつけるかのように。

俺たちを散々濡らしていた雨は、いつの間にか止んでいて、雲の切れ目から茜色の光が注いでいた。

長い口付けが終わると、彼女は俺から離れ、柵の前に立った。

……ッ！？

彼女の体は半透明に透け、茜色の光を放っていた。

「友利子……さん」

彼女の話は、本当だったのか。なのに俺は……。

「借り、返せそうにないから、今ので許して」

彼女はいつもの笑顔に戻り、俺にそう言った。

「ずるいですよ」

そうぼやくと、彼女はくすつと笑い、もう一度俺と口付けを交わした。

「ありがと、ハジメくんに出会えてよかった……本当に、よかったよ」

「俺も、友利子さんに会えてよかった」

「バイバイ……ありがと」

彼女は自分の体が消えるまで、小さく手を振り続けた。

雲も次第に流れていき、目に映る景色は、一面茜色に染まっていた。

「……ホントにずるいですよ、友利子さん」

俺は荷物をまとめ、彼女の匂いが残るスポーツタオルを握りしめ、いつものように帰路についた。

今度、彼女に花でも手向けよう。

彼女と同じ匂いがする花を。

下（後書き）

どうも、九条玖々です。

初投稿ではないのですが復活作ということで、短編小説を書きました。

進歩なしの拙い作品なのですが、読んでいただき、どうもありがとうございます。

誤字脱字もあるかと思いますが、その辺は気軽に言ってください。私、非常に助かります。

感想、批評もどしどしお待ちしております。

次回作は長編を書きたいなと思いつつ、お開きにします。
でわわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9269/>

茜空に映る君

2010年10月8日14時35分発行